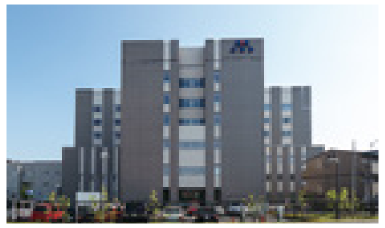
Face & Face フェイス＆フェイス

薬剤部・薬局訪問 第111回 松波総合病院

医療の質・医療安全の向上に貢献 薬剤師の視点で主体的に課題を探索

松波総合病院は、地域完結型医療の拠点として救急医療、高度急性期医療だけでなく、リハビリテーション等を含む回復期医療にも注力しています。薬剤部では、医療の質や医療安全の向上に寄与すべく、病棟を中心に業務の拡大を図っています。その取組みについて、薬剤部長の野田孝夫先生、主任の長谷川裕矢先生、薬剤師の野田佳那先生、黒川恵理先生、武山静夏先生に伺いました。



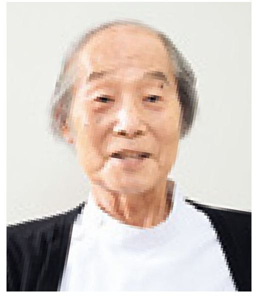
［社会医療法人 蘇西厚生会 松波総合病院］
岐阜県羽島郡笠松町田代185-1
●病　院　長：松波 和寿
●病　床　数：501床
●外来患者数：1日平均約476人
●外来患者への処方箋発行枚数：1カ月平均約5,035枚
院外処方箋発行率：約78.2%
●薬 剤 師 数：41名
〈2018年8月現在〉

各薬剤師が自由に力を発揮できる環境づくりに努める

●●薬剤部の方針と、注力する取組みをお教えください。

野田（孝）　調剤を基本に置き、病棟薬剤業務、薬剤管理指導、チーム医療を通じた医療安全向上と医師の負担軽減を図るとともに、病院経営への貢献を目指して取り組んでいます。

薬剤師は、ジェネラリストとしての力を蓄えた上で、専門性を磨くことが望ましいと考えています。この基本に則った上で、各薬剤師が自由に力を発揮できる、つまり柔軟な発想で業務の中から課題を発見、対応できる環境づくりに努めています。



薬剤部長
野田 孝夫 先生

近年では、特にプロトコールに基づく薬物治療計画（PBPM：Protocol Based Pharmacotherapy Management）にも注力しています。現在、当院では16のプロトコールが運用されていますが、薬剤師の提案から始まったものも多く、医師の負担軽減に寄与していると自負しています。

患者さんの背景をしっかり把握し指導や処方提案を行う

●●業務や活動の様子を具体的にお教えください。

長谷川　私は栄養サポートチーム（NST）専門療法士としての知識やスキルを活かし、シームレスに在宅医療へ繋げられるよう、在宅経腸栄養法（HEN*1）や在宅中心静脈栄養法（HPN*2）の指導や体制づくりに取り組んでいます。

*1 HEN：Home Enteral Nutrition
*2 HPN：Home Parenteral Nutrition

HENについては、2017年から退院時の薬剤師介入についての標準化を行いました。これにより、患者さんへの医療材料の提供から患者指導、管理料算定に至るまで、ルールに基づいて適正に行うことができるようになりました。その後、同様の取り組みをHPNにも拡大しました。

患者家族や病棟看護師、ソーシャルワーカーなどを交えた退院時共同指導では、退院後の生活環境や家族の希望などを考慮した上で経腸栄養剤や輸液製剤の変更を提案することもあります。適切にHEN、HPNを行ってもらうよう、入院中から退院後の見通しを立てて、処方提案などの介入を心がけています。

主任
長谷川 裕矢 先生
NST専門療法士

私は専任の担当病棟を持たず、様々な病棟をサポートしています。臨床栄養の専門性を活かすことに加え、ジェネラリストとしてのスキル向上に努めています。

野田（佳）　地域包括ケア病棟の専任薬剤師として、患者さんがスムーズに在宅復帰できるよう退院支援を行っています。

具体的には、退院後の患者さんや家族の生活状況に合わせて入院中から服薬回数を減らしたり、服薬しやすい時間に変更するなど、アドヒアランス向上を考慮して処方変更を提案しています。

薬剤師
野田 佳那 先生

飲み間違いや飲み忘れしがちな患者さんには、入院中からお薬カレンダーを使って正しく服薬する練習をしてもらい、退院後の自己管理に繋げています。

また患者さんの病態によっては退院時共同指導カンファレンスにて介護者とも直接話をし、服薬上の留意点などの情報を詳細に提供しています。

黒川　整形外科と脳神経外科をメインとする病棟を担当しています。両診療科とも周術期の患者さんが多く、入院前に指導した術前の休薬が適切に実践されているか、また術後に抗血栓薬などが予定通り再開されているか、注意深く確認を行っています。

薬剤師
黒川 恵理 先生

整形外科では、PBPMの一環として薬剤師による持参常用薬の処方入力を実施しています。各患者さんの持参薬の残数に合わせて処方日数を変更することで、医師の処方の手間を簡略化し、看護師も管理しやすいようにしています。

患者さんに対しては、手の痺れによって服薬が困難ではないか、上体を起こせるかなど、身体状況をしっかり確認した上で服薬管理の方法を検討・提案しています。

武山　担当する病棟は複数の診療科の入院患者さんが多く、それぞれの病態をしっかり把握するために、医師や看護師、他の医療スタッフと密に情報共有するよう努めています。また、どの患者さんにも漏れなく指導が行えるよう、介入の日付を確認しながら指導しています。

患者さんの疾患は様々で、介入方法も一様ではありません。緩和ケアチームやNSTの病棟ラウンドに積極的に参加し、患者さんにとって最適な薬剤や投与法を検討しながら処方提案に繋げています。

高齢患者さんも多いため、ポリファーマシー対策も重要です。入院時に服薬の必要性や重複投与の有無を見極めて医師に減薬を提案することもあります。

更なる専門性の追求と院外に向けた情報発信を目指す

●●今後の抱負や展望をお聞かせください。

野田（佳）　お薬カレンダーによる服薬管理が、地域包括ケア病棟だけでなく他病棟にも広がるよう、院内での情報発信に努めていきたいと考えています。

また、現在、AST（Antimicrobial Stewardship Team）の業務にも携わっており、今後は感染管理についても勉強していきたいです。

武山　ローテーションにより担当病棟が変わっても、個々の患者さんに最適な薬物療法が行えるよう貢献したいと考えています。今後は抗がん薬や緩和ケアに関する知識も学びながら、将来の方向性を考えていきたいと思います。

薬剤師
武山 静夏 先生

黒川　担当病棟である整形外科や脳神経外科の領域に関する知識を深めつつ、ジェネラリストとして幅広い知識を身につけていきたいと考えています。

現在、糖尿病センターの多職種チームにも参加しており、糖尿病療養指導士の資格取得に向けて励んでいるところです。

長谷川　HENおよびHPNについては、今後は保険薬局とも連携し、地域全体で適正な在宅栄養管理を推進していきたいと思います。

また、退院後の服薬ノンコンプライアンスによる病態悪化をいかに防ぐかも重要です。例えば、心房細動の患者さんでは、心原性脳塞栓症の予防に抗凝固薬の継続的な服用が重要です。このような啓発や患者教育を通し、将来の機能障害や低栄養の予防に少しでも貢献していきたいと考えています。

野田（孝）　当薬剤部の薬剤師は意欲的に新たな取組みにチャレンジしていますが、その成果をアピールすることが更に必要だと感じています。学会発表や論文作成など、自分たちの業績を外部に発信できるよう支援していきたいと思います。